

<寄稿要項>野坂昭如「アメリカひじき」（読書・映画・音楽）

佐々木, 和美

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

54

(開始ページ / Start Page)

123

(終了ページ / End Page)

123

(発行年 / Year)

1996-07-13

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019917>

最後の重大罪の名前は、「憤怒」であった。妻を殺し、刑事を逆上させ、大罪を完成させたのである。では、何故、自分を殺させたのか。それは、なにげなく生きている人にも、大罪は存在する事を見つけたのだ。

まして、正義である刑事が犯罪を犯してしまふのである。ふだんは、犯罪とか罪というものに無関係であると思っている人々に、犯罪の原因であるものは誰にも存在する事を見つけたのだ。

まさに犯人は、宣教師であった。大罪を象徴すべき人物を殺し、最後には、観客までもに罪が存在する事を証明した。そして、自分が殺される事によって、刑事達の勝負に勝ち、まるで英雄のようだった。

この映画は、見終わって気分がよくなくなるような映画ではない。むしろ、逆である。主人公である刑事達は敗北し、その一人は犯罪者になってしまふからだ。何かこの映画は、善とか悪とか、あやふやになり、あいまいとなった現代を象徴するようにも思えた。正義が必ずしも勝たない、悪者もただの狂人ではない、インテリである事を考えると、そう思えるのである。

(3年F組)

野坂昭如

「アメリカひじき」

佐々木 和美

成人した主人公が、自分の家にアメリカ人夫婦を招待したことをきっかけに、かつての自分がアメリカ人たちに対してどのような接し方をしていたのか、自分にとって彼らほどのような存在だったのか、ということを変更して考え直すとするのだが、いつの間にか彼らのペースに乗せられ、都合のいい小間使いになってしまふ。拒否しようと決心した気持ちに対抗できずに、言われるままに行動してしまふ主人公の姿は、現代人の中にも根強く生きていると感じる。生活様式の西洋化がますます進む現在、日本人でありながら、見た目の形ばかりでなく、内面の考え方を西洋化しようとしている。多くの民族を色々な面で一つにしようとする際の代表的な存在で

あるアメリカを、我々は無意識うちに受け入れていることが多いと感じる。結果によっては、それが正しい時もあるが、必ずしもそれに従う必要はないように思える。見た目をアメリカ人に近づけようと必死になればなるほど、そこに日本人臭さが表れる。見た目ばかりでなく、内面の精神的な部分や考え方でそれに従おうとする姿は、戦後間もない時の主人公の姿の延長線のように見えてくるのである。現代人は、アメリカを真似ることは良いことだと知らず知らずのうちに思い込み、身近な生活の中にまでそれを受け入れ、実行している。現に私も、自分では気がつかないだけで、アメリカを生活の中に取り入れ、それが当たり前のようになっていく。この主人公が、かつてブラックティーの葉を「アメリカひじき」と思い込んで食べた日のことを、今は高級牛肉を食べながら思い出している姿に、アメリカに対する未だに根付いている媚びたような自分を悔いていると感じるのである。また、貧しかった時代にはアメリカひじきのようなものしか食べることができなかった自分が、今では高級料理を人にもてなすまでになったというギャップに対し、時間の流れを痛感したのである。

(通教部4年)